

大学生のアイデンティティ・スタイルと キャリア発達の基礎スキル

新見直子・前田健一・越中康治・松田由希子¹・淡野将太¹

(2007年10月4日受理)

Identity Style and Basic Skills for Career Development of University Students

Naoko Niimi, Kenichi Maeda, Koji Etchu, Yukiko Matsuda and Syota Tanno

Abstract. The purpose of this study was to investigate whether identity style is related to self-evaluation of university students regarding basic skills and abilities necessary for employment (basic skills for career development). First, the reliability and validity of the Japanese version of the Identity Style Inventory were confirmed by using three measures. Secondly, a canonical correlation analysis examined whether three identity styles (informational, normative, and diffuse/avoidant) are related to self-evaluation measured by the four subscales of basic skills for career development: interpersonal, utilization of information, future planning, and decision-making scales. The results were as follows: (1) the informational style was positively and the diffuse/avoidant style was negatively related to interpersonal, utilization of information, future planning, and decision making skills. (2) The normative style did not have significant relationships to four of basic skills for career development. These results suggest that problem solving concerning the orientation of identity is consistently related to basic skills for career development.

Key words: identity style, basic skills for career development, university students

キーワード：アイデンティティ・スタイル, キャリア発達の基礎スキル, 大学生

問題と目的

アイデンティティ形成と職業選択は、青年期の重要な発達課題である。Erikson (1959) は青年期のアイデンティティ形成に関わる心理社会的危機の解決にとって、職業観・価値観やイデオロギー等の確立が重要であると述べ、アイデンティティ形成と職業選択の密接な関連性を指摘している。鎌・宮下・岡本(1997)や鎌・岡本・宮下(2002)によると、この関連性を直接検討した研究は、1987年からみられるようになり、その後の10年間に11編の論文が発表されている(例えば、Blustein, Devenis, & Kidney, 1989; Dellas & Jernigan, 1987; Vondracek, Schulenberg, Skorikov,

Gillespie, & Wahlheim, 1995)。

例えば、Vondracek et al. (1995) は、中学生と高校生を対象に「いずれは仕事に就かなければならないが、就きたいと思うものがない」などの18項目から構成される職業未決定尺度を実施した。アイデンティティ地位タイプの4群間で比較した結果、職業未決定得点は、アイデンティティ拡散群で最も高く、次に早期完了群、モラトリアム群の順となり、アイデンティティ達成群で最も低かった。また、Blustein et al. (1989) は、大学生を対象にアイデンティティの各地位タイプ得点と職業探索活動得点との関連を検討した。職業探索活動得点は、「特定の職業や会社に関する情報を収集する」などの環境探索6項目や自己探索9項目を使用して算出された。正準相関分析の結果、アイデンティティ達成得点やモラトリアム得点が高い

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

者ほど、職業探索活動得点が高い関係にあった。

以上のように、11編の研究のほとんどは、アイデンティティ形成が職業選択と関連することを実証している。しかし、これらの研究にはいくつかの限界や問題点があると指摘できる。その第1は、Marcia (1966)の提唱した地位タイプの観点からアイデンティティ形成を捉えていることである。Marcia (1966)は、危機と積極的関与の2つの基準を組み合わせてアイデンティティ形成を操作的に定義し、4つの地位タイプを分類した。当初、4つの地位タイプは、アイデンティティの形成過程に対応するものと考えられていた。すなわち、アイデンティティ形成過程は、未形成なアイデンティティ拡散から、早期完了やモラトリアムを経て、アイデンティティ達成に至る上昇的な変化過程であると考えられていた。さらに、アイデンティティ達成の地位タイプに一度到達すると、アイデンティティ形成過程の下位段階である他の地位タイプには変動しないと思われていた。しかし、その後の縦断的研究(例えば、Adams & Fitch, 1982; Marcia, 1976)は、地位タイプの上昇的な変化だけでなく、アイデンティティ達成からモラトリアムなどへの下降的な変化も生じることを実証した。これらの結果は、地位タイプが一過的な分類結果に過ぎず、変動しやすいことを示唆する。

Berzonsky (1990)は、多様な自己領域(社会的自己や道徳的自己など)を統合し、全体的な自己構造を構築する過程としてアイデンティティ形成過程を捉えている。このアイデンティティ形成に関するプロセス・モデルによると、地位タイプの変動は次のように説明される。例えば、アイデンティティ達成地位の者は、ある程度統合化された自己構造を構築している。しかし、既存の自己構造では同化できないような新たな問題、例えば職業選択等の意思決定の問題に直面したとき、アイデンティティ達成地位の者でも既存の自己構造をいったん分解して新たな自己構造を再構造化する必要が生じる。既存の自己構造を分解して各自己領域を再組織化している最中に地位タイプを分類すると、達成地位であった者でもモラトリアムや早期完了の地位タイプへ下降するのである。

そこでBerzonsky (1990)は、新たな問題に直面するたびに変動しやすい地位タイプの代わりに、アイデンティティ形成過程を通じて一貫して示される志向性の個人差に注目し、アイデンティティ・スタイルという概念を提唱している。アイデンティティ・スタイルとは、アイデンティティ形成過程で直面する重要な問題を解決するとき、個人が一貫して示す認知的な処理スタイルであり、情報スタイル、規範スタイル、拡散/回避スタイルの3つに大別される。Berzonsky

(1990)は、各アイデンティティ・スタイルの特徴を次のように説明している。情報スタイルの者は、問題に正面から向き合い自力で解決しようとして、積極的に情報を収集し、その中から有益で適切な情報を選択する。規範スタイルの者は、親などの重要な他者の期待や規範に従って未経験の事柄を処理するので、意思決定の際に悩み迷うことがほとんどない。拡散/回避スタイルの者は、問題に直面しても問題の解決を延期・回避して、一時的な対処しかしない。これら3つのアイデンティティ・スタイルは、変動しやすい地位タイプよりも一貫性が高いので、アイデンティティ形成過程を捉えるのに適していると考えられる。そこで本研究では、アイデンティティ・スタイルを取り上げて検討することにした。

先行研究の限界や問題点の第2は、職業選択を職業的興味(Vondracek et al., 1995)や職業探索(Blustein et al., 1989)の側面から捉えており、自分に適した職業を選択するために必要な能力やスキルの発達程度を測定していないことである。Super (1990)は、キャリア発達を生涯にわたる過程と捉え、この過程を成長期(14歳未満)、探索期(14から24歳)、確立期(25から45歳)、維持期(45から65歳)、下降期(65歳以上)の5段階に分類した。Super (1990)によると、未就業の成長期と探索期のキャリア発達の中心は、キャリア成熟度、すなわち職業に対する知識を広げ各発達段階の課題を解決して将来の適切な職業選択に備えることである。それに対して、就業後の確立期以降のキャリア発達は、キャリア成熟度に基づいて実際の仕事内容や環境条件の変化に適応することである。つまり、未就業の小学生から大学生までに、職業選択に備えて多様な能力やスキルを獲得することが、職業選択だけでなく就業後のキャリア発達にも重要である。そこで、本研究では、未就業の間に獲得する能力やスキルをキャリア発達の基礎スキルと呼び、これを検討することにした。キャリア発達の基礎スキルをより発達させている大学生ほど、職業選択の実行可能性が高まり、就業後の職業生活にもうまく適応していくと考えられる。

わが国のキャリア教育では、Super (1983, 1990)と同様に、学校教育の中で、将来、社会人・職業人として自立するために必要な能力等を身に付けさせることが重要であると考えている(三村, 2004)。キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議(平成16年1月28日答申)は、職場体験や通常の教科学習などを通して、職業観・勤労観の形成に関連する能力を身につけておくことが、後年の職業選択に対する積極的な取り組みや生涯にわたるキャリア形成の基盤になると考えている。さらに、国立教育政策研究所生徒

指導研究センター（2002）では、この考えを具体化して職業観・勤労観の形成に関連する能力を人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力の4つの領域に大別し、小学校から高等学校までの児童生徒が発達段階に応じて身につけるべきスキルや能力・態度を例示している。

4つの能力領域の内容はそれぞれ次のように説明されている。人間関係形成能力は、他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・協同してものごとに取り組むための能力である。情報活用能力は、学ぶこと・働くことの意義や役割およびその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かすための能力である。将来設計能力は、夢や希望をもって、将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計するための能力である。意思決定能力は、自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服するための能力である。

以上のように、現在のキャリア教育では、どのような職業に就く場合にも必要なキャリア発達の基礎スキルを小学校から高等学校の間に段階的に習得させることを重視している。本研究では、キャリア教育で重視される4領域の具体的な能力・スキル（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002；三村、2004）に基づいて、大学生のキャリア発達の基礎スキルを測定する尺度を作成した。

本研究の主な目的は、アイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキルとの関連を検討することである。先行研究（Berzonsky, 1990; Blustein et al., 1989; Vondracek et al., 1995）から、情報スタイルは情報活用や意思決定と正の、逆に拡散／回避スタイルは情報活用や意思決定と負の関連を示すと予想される。その他の関連については探索的に検討を行う。ところで、この予想を検討する前に、本研究では、Berzonsky（1992a）が開発したISI（Identity Style Inventory）を邦訳・修正したアイデンティティ・スタイル尺度の信頼性と妥当性を検討する。なぜなら、オリジナルのISIの信頼性や妥当性は、いくつかの研究で検討されているが、ISIの邦訳・修正版の信頼性や妥当性を検討した研究はこれまで報告されていないからである。そこで、まずはじめにISIの邦訳・修正版の再検査信頼性や基準関連妥当性を検討し、オリジナルのISIの信頼性や基準関連妥当性に匹敵するか否かを比較検討することにした。

Berzonsky（1989）は、ISIの基準関連妥当性をlocus of controlの外的統制得点との関連から検討し

た。その結果、外的統制得点は情報スタイル得点と有意な負相関（ $-.39$ ）を、拡散／回避スタイル得点と有意な正相関（ $.39$ ）を示したが、規範スタイル得点とは有意な相関（ $-.11$ ）を示さなかった。本研究でも、locus of control尺度（鎌原・樋口・清水、1982）を使用して基準関連妥当性を検討し、Berzonsky（1989）の結果と比較する。Berzonsky（1992b）は3つのアイデンティティ・スタイル群の問題対処傾向を比較検討している。その結果、情報スタイル群は問題対処傾向が強いものに対して、規範スタイル群や拡散／回避スタイル群は問題回避傾向が強かった。本研究では、Berzonsky（1992b）の問題対処傾向尺度にある程度対応するものとして自己充實的達成動機尺度（堀野・森、1991）を使用する。Berzonsky & Ferrari（1996）は、「意思決定を回避する」などの質問項目で測定される意思決定についてアイデンティティ・スタイル群間で比較している。その結果、意思決定を避ける傾向は、拡散／回避スタイル群が規範スタイル群や情報スタイル群よりも、規範スタイル群が情報スタイル群よりも、有意に強かった。Berzonsky & Ferrari（1996）の意思決定尺度に対応するものとして、職業選択の意思決定を回避する傾向を測定する職業忌避的傾向尺度（古市、1995）を使用する。

方 法

対象者 心理学の授業を受講している大学2、3年生275名（男性106名、女性169名）を対象に、5回の授業にわたって継続的に調査した。いくつかの調査を組み合わせて分析を行った。調査日によって欠席者数や未記入者の人数が異なるため、分析対象者は、78名から275名の範囲にわたる。なお、各調査の有効回答者数は、調査1では240名、調査2では275名、調査3では118名、調査4では248名、調査5では240名であった。

実施時期 2003年10月から2004年1月の授業時および2005年4月から7月の授業時にそれぞれ5回ずつの調査を実施した。

手続き 5回の調査は、いずれも授業時間の一部（約15分～20分）を使用して集団実施した。調査1では職業忌避的傾向尺度を、調査2ではアイデンティティ・スタイル尺度とキャリア発達の基礎スキル尺度を、調査2から2週間後の調査3ではアイデンティティ・スタイル尺度の再テストを、調査4では自己充實的達成動機尺度を、調査5ではlocus of control尺度を実施した。

測定尺度と得点化 以下の5尺度を使用した。

(1) アイデンティティ・スタイル尺度：Berzonsky

(1992a) の ISI の 40 項目の中から、コミットメント尺度を除く 30 項目を選出し、日本語としてわかりやすい内容に邦訳した。

まず、女子大学生 30 名を対象にアイデンティティ・スタイル尺度の 30 項目を提示し、内容がわかりにくい項目や回答しにくい項目について指摘するように求めた。その結果から、指摘数が比較的多かった以下の 3 項目を不適切項目として削除した。「a. 宗教について、本を読んだり、人と話したりすることに多くの時間を費やしてきた」(情報スタイル)。「b. 宗教について、私はいつも何を信じればよいかを知っていた。また、そのことにどんな疑いももったことがない」(規範スタイル)。「c. 私は、高校生の頃から、大学で何を専攻するかを決めていた」(規範スタイル)。宗教に関する項目 a と b を削除した理由は、「宗教のことについては考えたこともないので回答できない」、「質問の意味がわかりにくい」等の意見が多くみられたからである。項目 c を削除した理由は、項目 c の内容を「高校生の頃から情報を積極的に収集・分析し、大学で何を専攻するかを早くから決定していた」と解釈すると、項目 c は規範スタイルよりも、むしろ情報スタイルを捉える可能性が強いと考えたからである。

次に、英語を母国語とする女性 1 名にバックトランスレーションを依頼し、27 項目について ISI の原文との類似度を 5 段階 (ぜんぜん似ていないの 1 点～とても似ているの 5 点) で評定させた。その結果、項目 2 「私には本当のところ、学校でやっていることが役に立つとは思えない。なぜなら、物事はなるようになると思っているからだ」(拡散/回避スタイル) の評定値が 1 点であったので、この項目を除外した。なお、項目 2 を除く残り 26 項目の評定平均は 4.54 であった。

残りの 26 項目について各下位尺度が Berzonsky (1992a) の想定する 3 つのアイデンティティ・スタイルを構成しているか否かを検討するため、275 名 (調査 2) のデータに基づいて、各下位尺度別に 1 成分を仮定した主成分分析を行った。その結果、情報スタイル 9 項目 ($a = .75$)、規範スタイル 5 項目 ($a = .54$)、拡散/回避スタイル 8 項目 ($a = .76$) の 22 項目がそれぞれ当該因子に対して .30 以上の負荷量を示した。さらに、表 1 に示す 22 項目に対して確認的因子分析を行ったところ、ある程度の適合度指標が得られた ($GFI = .86$, $AGFI = .82$, $RMSEA = .07$)。これらの結果から、本研究のアイデンティティ・スタイル尺度 22 項目は、Berzonsky (1992a) と同様の 3 因子から構成されることが確認された。

Berzonsky (1992a) と同様に、各項目内容が自分にあてはまると思う程度を 5 段階 (まったくあてはま

表 1 アイデンティティ・スタイル尺度の確認的因子分析結果

	項目	推定値
I	情報スタイル	
	1 人生で何をすべきかについて、真剣に考えることに多くの時間を費やしてきた。	.41
	4 誰かと議論するときには、相手の立場にたつて、その人の視点からも考えようとする。	.42
	10 自分の納得のいく価値観をもつために、人と討論したり、多くの時間を費やしてきた。	.39
	13 個人的な問題が生じたとき、理解を深めるために、その状況を細かく検討しようとする。	.59
	14 何か問題があるとき、専門家(教師、医師、弁護士など)に意見を求めることはよいことだと思う。	.25
	18 自分にとって大事な問題に取り組むことは、しばしば自分にとって重要なきっかけになると思う。	.63
	21 何か決断しなければならぬとき、いくつかの選択肢について時間をかけてよく考えたいと思う。	.51
	23 人生において自分で考えなければならぬ事柄については、責任をもって対処したいと思う。	.69
	25 大事な決断をするときには、その前にできるだけ多くの情報を集めておきたいと思う。	.65
II	規範スタイル	
	6 私がいつも人生の目標をもってきたのは、何かに向かって努力するようにしつけられてきたからだと思う。	.38
	11 新しい考えを取り入れるよりも、ゆるぎない信念をもっている方がよいと思う。	.58
	16 いろいろな価値について悩むよりも、決まった価値観をもっていた方がよいと思う。	.65
	20 一度よい問題解決法をみつけたら、その方法を繰り返し使っていく方がよいと思う。	.34
	27 何か問題が生じたときには、親しい友人や家族・親類の意見に従う方がよいと思う。	.20
III	拡散/回避スタイル	
	7 自分にとって大事な問題であっても、たいてい何とかなると思ってほうっておく。	.57
	9 自分の将来について今は真剣に考えない。それはずっと先の話だと思う。	.44
	12 何か決断をしなければならぬときでも、何かが起こるまで決断を延期しようとする。	.53
	15 人生についてあまり深刻に考えない方がよいと思う。人生は楽しむものだ。	.46
	17 私は、様々な問題について考えたり、関わったりすることをできるだけしないようにしている。	.62
	19 自分のことを自分で考え、自分で対処することを求められる状況避けようとする。	.54
	24 これから起こると思われる問題について考えてもしかなかった。物事はなるようにしかならないと思うからだ。	.62
	26 ある状況で自分にストレスがかりそうだと感じると、それを避けようとする。	.48

注) 3 つの下位尺度間の相関係数を算出したところ、情報スタイルと規範スタイルでは $r = .08$, $p > .10$ 、情報スタイルと拡散/回避スタイルでは $r = -.37$, $p < .01$ 、規範スタイルと拡散/回避スタイルでは $r = .06$, $p > .10$ であった。

らないの1点～とてもよくあてはまるの5点)で評定させた。下位尺度間で項目数が異なるので、各下位尺度得点は1項目あたりの平均値(得点範囲は1点～5点)を使用した。3つの下位尺度得点は、得点が高いほど各下位尺度の傾向が強いことを表す。

(2) キャリア発達の基礎スキル尺度: 国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002)が提示している「(資料)職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」の中から、高等学校段階で育成することが期待される具体的な能力・態度を参考に独自に作成した(表2参照)。表2に示すとおり、キャリア発達の基礎スキル尺度は4項目ずつの4下位尺度(人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定)から構成されている。

まず、275名のデータに基づいて領域別に1因子を仮定した主成分分析を行った。その結果、人間関係形成4項目($\alpha = .53$)、情報活用4項目($\alpha = .51$)、将来設計4項目($\alpha = .71$)、意思決定4項目($\alpha = .64$)の16項目がそれぞれ当該領域に対して.50以上の高い負荷量を示すことが示された。さらに、キャリア発達の基礎スキル尺度の16項目が国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002)の枠組みから想定される領域から構成されることを確認するため、確認的因子分析を行った(表2)。その結果、高い適合度指標が得られた($GFI = .91$, $AGFI = .88$, $RMSEA = .07$)。これらの結果から、キャリア発達の基礎スキル尺度は、想定された4領域から構成されることが確認された。

次に、キャリア発達の基礎スキル尺度の再検査信頼性を検討するため、調査2のキャリア発達の基礎スキル尺度の実施から5週間後に、一部の対象者に対して再テストを実施した。2回のデータが揃っている分析対象者数は56名(男性13名、女性43名)であった。テスト-再テスト間の相関係数を算出した結果、人間関係形成では $r = .76$ 、情報活用では $r = .63$ 、将来設計では $r = .71$ 、意思決定では $r = .70$ であった。これら4つの信頼性係数はすべて1%水準で有意であった。また、後述する職業忌避的傾向尺度(古市, 1995)との相関係数からキャリア発達の基礎スキル尺度の基準関連妥当性を検討した。その結果、4領域のいずれにおいても職業忌避的傾向尺度と有意な負相関が示され、基準関連妥当性がある程度示された。すなわち、人間関係形成では $r = -.22$, $p < .05$ 、情報活用では $r = -.23$, $p < .01$ 、将来設計では $r = -.30$, $p < .01$ 、意思決定では $r = -.35$, $p < .01$ であった($n = 132$)。

各項目の内容や行動をどの程度できると思うかについて5段階(まったくできないの1点～非常にできるの5点)で評定させた。4領域別に1項目あたりの平均値(得点範囲は1点～5点)を算出し、それを各下

表2 キャリア発達の基礎スキル尺度の確認的因子分析結果

項目	推定値
I 人間関係形成	
1 自分と違う考え方をもっている人でも友だちになる。	.49
3 自分の考えていることを人にきちんと伝える。	.42
10 友だちや恋人とケンカをしたとき、お互いの意見を調整しながら仲直りする。	.56
15 友だち、先生、親などと話をするとき、その場にあった態度や言葉遣いをする。	.43
II 情報活用	
5 やりたいことがいくつかあるとき、それぞれの情報について検討してから決める。	.58
7 希望する進路先で、実際にどんなことをしているのかを具体的に知っている。	.34
9 好きな科目や興味のあることと、将来の仕事とを関連づけて考える。	.50
13 自分の知りたい情報を、本・雑誌やインターネットなどを使って集める。	.41
III 将来設計	
6 自分で出来ることについては、責任をもってやり遂げる。	.61
11 すぐに出来ることから順番に考えて、計画的に目標を達成する。	.58
12 集団で何かをするとき、自分のすべきことを考えて行動する。	.60
16 計画に問題が起きても、計画を修正して問題に対処する。	.68
IV 意思決定	
2 迷って決めたことでも、自分で決めたことは最後までやり通す。	.56
4 何かを決めるとき、人の意見に従うのではなく、自分なりの結論を出す。	.44
8 何か問題が発生したとき、それを解決するための解決方法をいくつか考える。	.55
14 自分の目標を達成するまでに、多少の障害があってもあきらめない。	.67

注) 4つの下位尺度間の相関係数を算出したところ、人間関係形成と情報活用では $r = .38$ 、人間関係形成と将来設計では $r = .47$ 、人間関係形成と意思決定では $r = .47$ 、情報活用と将来設計では $r = .49$ 、情報活用と意思決定では $r = .51$ 、将来設計と意思決定では $r = .66$ であった。これら6つの相関係数は、いずれも1%水準で有意であった。

位尺度得点とした。得点が高いほど各下位尺度のスキルや能力を高く自己評価していることを意味する。

(3) locus of control 尺度: 鎌原他(1982)のlocus of control 尺度を使用した。この尺度は、「あなたは、何でも、なりゆきにまかせるのが一番だと思いますか」や「あなたの人生は、運命によって決められていると思いますか」などの18項目から構成されていた。各項目が自分にあてはまると思う程度を5段階(そう思うの1点～そう思わないの5点)で評定させた。18項目の合計得点が高いほど、外的統制傾向が強くなるよう

に得点化した後、1項目あたりの平均値（得点範囲は1点～5点）を算出した。なお、鎌原他（1982）によると、locus of control 尺度の信頼性については、18項目の α 係数が .78、テスト-再テスト信頼性係数が $r=.76$ であった。本研究における α 係数は .78であった。

(4) 自己充實的達成動機尺度：堀野・森（1991）の達成動機測定尺度の下位尺度である自己充實的達成動機尺度を使用した。この尺度は、「いつも何か目標を持っている」と「人と競争することより、人とくらべることができないようなことをして自分をいかしたい」などの13項目から構成されていた。各項目が自分にあてはまると思う程度を5段階（まったくあてはまらないの1点～とてもよくあてはまるの5点）で評定させた。1項目あたりの平均値（得点範囲は1点～5点）を算出し、それを尺度得点とした。得点が高いほど自己充實的達成動機傾向が強いことを表す。本研究における α 係数は .93であった。

(5) 職業忌避の傾向尺度：古市（1995）の職業忌避の傾向尺度を使用した。この尺度は、「いつまでも仕事をしないで遊んで暮らせたらいいのと思う」と「いまは将来の職業について考えたくない」などの10項目から構成されていた。各項目が自分にあてはまると思う程度を5段階（まったくあてはまらないの1点～とてもよくあてはまるの5点）で評定させた。1項目あたりの平均値（得点範囲は1点～5点）を算出し、それを尺度得点とした。得点が高いほど職業忌避の傾向が強いことを表す。古市（1995）は大学1, 2年生652名を対象にして職業忌避の傾向尺度10項目の α 係数を算出し、.81の高い値を報告している。本研究における α 係数は .74であった。

結果

信頼性の検討 本研究では、アイデンティティ・スタイル尺度を2回実施した。2回のデータが揃っている分析対象者数は78名（男性38名、女性40名）であった。2週間間隔のテスト-再テスト間の相関係数を算出した結果、情報スタイル尺度では $r=.61$ 、規範スタイル尺度では $r=.66$ 、拡散/回避スタイル尺度では $r=.68$ であった。これらの信頼性係数はすべて1%水準で有意であった。

妥当性の検討 アイデンティティ・スタイル尺度の妥当性は、この尺度と他の3つの尺度との関連性から検討した（表3）。表3は尺度得点間の相関係数を示したものである。locus of control の外的統制および職業忌避の傾向は、情報スタイルと有意な負相関を、拡散/回避スタイルと有意な正相関を示したが、規範

表3 各得点間の相関係数

	locus of control	自己充實的達成動機	職業忌避的傾向
情報スタイル	-.30 **	.33 **	-.21 **
規範スタイル	-.11	.20 **	.13
拡散/回避スタイル	.28 **	-.15	.44 **

** $p < .01$.

スタイルとは有意な相関を示さなかった。自己充實的達成動機は、情報スタイルや規範スタイルと有意な正相関を示した。

アイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキルの関連 本研究の主な目的は、3つのアイデンティティ・スタイルと4つのキャリア発達の基礎スキルの関連を検討することであった。この目的を達成するために正準相関分析を行った。正準相関分析を使用する理由は次のとおりである。本研究では、3つのアイデンティティ・スタイル下位尺度間や4つのキャリア発達の基礎スキル下位尺度間に有意な相関が示されている。正準相関分析を使用すると、互いに関連する変数群を使用して、2つの変数群間の関連を一度に検討することが可能になるからである。

正準相関分析を行う前に、先行研究（例えば、Bartley & Robitschek, 2000; Blustein et al., 1989; Turner, Trotter, Lapan, Czajka, Yang, & Brissett, 2006）と同様に、性差の検討を行った。その結果、人間関係形成で有意な性差がみられ ($t(273) = 2.40, p < .05$)、男性 ($M = 3.87$) が女性 ($M = 3.70$) よりも高い得点を示した。しかし、残りの6得点では有意な性差は認められなかった。そこで、本研究では、性別を考慮せずに正準相関分析を行うことにした。正準相関分析の結果、1つの正準相関が有意であった ($R_c = .43$, 説明率96.64%)。表4は正準相関と元変数群間との構造係数を示したものである。Bartley & Robitschek (2000) と Turner et al. (2006) を参考に、構造係数の有意性の判断基準として .30を設定した。表4をみると、情報スタイルを使用する者ほど4領域の基礎スキルが高く、逆に拡散/回避スタイルを使用する者ほど基礎スキルが低いという関係にあることがわかる。また、規範スタイルは、基礎スキルと有意な関連を示さなかった。

表4 正準相関分析の結果

	第1正 準相関
アイデンティティ・スタイル	
情報スタイル	.91
規範スタイル	.05
拡散/回避スタイル (冗長性)	-.72 .20
キャリア発達の基礎スキル	
人間関係形成	.63
情報活用	.79
将来設計	.84
意思決定 (冗長性)	.87 .28
正準相関係数	.67
<i>F</i>	16.24
<i>df</i>	(12, 709.35)
<i>p</i>	<.0001

注) 表中の太字は構造係数を表す。

考 察

本研究の主な目的は、アイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキルとの関連を検討することであった。正準相関分析の結果、情報スタイルは情報活用や意思決定と有意な正の、拡散/回避スタイルはこれら2つの基礎スキルと有意な負の関連を示した。これらの結果は、本研究の予想を支持するとともに、先行研究 (Berzonsky & Ferrari, 1996; Blustein et al., 1989; Vondracek et al., 1995) の結果とも一致する。また、探索的に検討した人間関係形成や将来設計でも情報スタイルは有意な正の、拡散/回避スタイルは有意な負の関連を示した。それに対して、規範スタイルはいずれの基礎スキルとも有意な関連を示さなかった。要するに、情報スタイルを使用する者ほどキャリア発達の基礎スキルの4下位尺度すべてに対して高い評価をし、拡散/回避スタイルを使用する者ほど低い評価をすることがわかった。以上の結果は、大学生のアイデンティティ・スタイルとキャリア発達の基礎スキルとの間に一貫した関連があることを実証するものである。

このような一貫した関連については、次のように解釈できる。まず情報スタイルの者は、積極的に情報を収集し、有益で適切な情報を取捨選択してアイデンティティ形成に関わる重要な問題の解決に取り組むと

いう一貫した志向性をもつ。彼らは、雑誌やインターネットあるいは人的ネットワークを通じて情報収集に取り組む中で情報活用スキルや人間関係形成スキルに対する自己評価を高めたと考えられる。また、目標達成や問題解決に適した情報を取捨選択する機会は、将来設計スキルや意思決定スキルの習得と活用を促したと考えられる。それに対して、拡散/回避スタイルの者は、自己構造の再構造化や自己領域を組織化するような重要な問題に取り組むことを回避する志向性を強く示す。彼らは、他のスタイルの者に比べて情報収集や問題解決に取り組まない理由を、基礎スキルの低さに帰属させたのかもしれない。規範スタイルの者は、重要な他者の期待や規範に従って問題解決をするという志向性をもつ。彼らは、解決策の選択決定に悩まないで、情報スタイルの者ほど積極的な情報収集や情報の取捨選択の際に自己評価をする機会が少ない。そのため、規範スタイルと基礎スキルの間にほとんど関連がなかったであろう。

最後に、本研究の問題点と今後の課題について述べる。第1に、本研究のアイデンティティ・スタイル尺度では再検査信頼性係数がオリジナルのISIに比べてやや低かった。本研究と Berzonsky (2004) および Berzonsky (1992b) の信頼性係数を順に記述すると、情報スタイル ($r=.61, r=.87, r=.75$)、規範スタイル ($r=.66, r=.87, r=.74$)、拡散/回避スタイル ($r=.68, r=.83, r=.71$) となる。本研究の信頼性係数がやや低かった理由の1つは、オリジナルのISIとは異なって、本研究では宗教に関する項目を削除したことである。宗教に関する項目は、宗教について多くの時間を費やすこと (情報スタイル) や揺るぎない信仰 (規範スタイル) について質問している。宗教のような確固たる信念や志向性は、短期間に変動しないので、これらの項目を含めたオリジナルのISIの信頼性係数を高めるのに役立つと考えられる。それに対して、本研究ではこれらの項目を削除した分だけ信頼性係数が低下したのと考えられる。

しかし、内的一貫性に基づく信頼性では、アイデンティティ・スタイルの各下位尺度の α 係数について、本研究、Dollinger (1995) および Nurmi, Berzonsky, Tammi, & Kinney (1997) の値を順に記述すると、情報スタイル ($\alpha=.75, \alpha=.59, \alpha=.74$)、規範スタイル ($\alpha=.54, \alpha=.62, \alpha=.58$)、拡散/回避スタイル ($\alpha=.76, \alpha=.64, \alpha=.76$) となり、オリジナルのISIを使用した研究と同レベルの信頼性が本研究でも示された。妥当性については、locus of control 尺度との相関からアイデンティティ・スタイル尺度の基準関連妥当性を検討した結果、Berzonsky (1989)

とほぼ同等の結果が得られた。また、自己充實的達成動機尺度や職業忌避の傾向尺度との相関パターンは、アイデンティティ・スタイルの3群間で問題解決に対する意欲や動機づけを比較したBerzonsky (1992b)の結果や、意思決定の回避傾向を比較したBerzonsky & Ferrari (1996)の結果とほぼ対応していた。

これらの結果を総合的にみると、本研究のアイデンティティ・スタイル尺度には一定の信頼性と妥当性があると判断できる。本研究のアイデンティティ・スタイル尺度は、オリジナルのISIを邦訳したものであるが、日本語版の作成過程で8項目を削除して22項目に縮減された。項目数の相違が信頼性や妥当性にも多少の相違を生み出したのであろう。しかし、オリジナルのISIを翻訳・修正してアイデンティティ・スタイル尺度を作成したのは、現在のところ本研究だけである。その意味では、Berzonsky (1989)と同様に多様な他の尺度との関連を検討し、本研究で作成したアイデンティティ・スタイル尺度の信頼性と妥当性を再確認するとともに、本研究の結果の一般性を検討する研究が求められる。

第2に、本研究ではキャリア発達の基礎スキルが職業選択と関連することを仮定したが、両者の関連度を直接検討していない。キャリア教育では、キャリア発達の基礎スキルを習得させることを通じて職業選択や確立期以降のキャリア発達を促すことを目的としている。基礎スキルの4下位尺度が職業忌避の傾向尺度と有意な負相関を示したことは、本研究で作成した基礎スキル尺度の基準関連妥当性を保証するだけでなく、基礎スキルが大学生の職業選択と関連することを示唆している。今後の研究では、大学生のキャリア発達の基礎スキルが、例えば実際の就職活動の実行度やその成果とどのように関連するのかなど、キャリア発達の基礎スキルと職業選択の関連を明らかにする必要がある。また、小学生、中学生、高校生を対象にして、キャリア発達の基礎スキルに関する発達の傾向を検討することも今後の課題である。そのためには、本研究で作成した大学生用のキャリア発達の基礎スキル尺度の妥当性、信頼性、項目内容等を再検討しながら、小学生や中学生に適したキャリア発達の基礎スキル尺度を開発していかねばならない。

引用文献

Adams, G. R., & Fitch, S. A. (1982). Ego stage and identity status development: A cross-sequential analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 574-583.

- Bartley, D. F., & Robitschek, C. (2000). Career exploration: A multivariate analysis of predictors. *Journal of Vocational Behavior*, 56, 63-81.
- Berzonsky, M. D. (1989). Identity style: Conceptualization and measurement. *Journal of Adolescent Research*, 4, 268-282.
- Berzonsky, M. D. (1990). Self-construction over the life span: A process perspective on identity formation. In G. J. Neimeyer & R. A. Neimeyer (Eds.), *Advances in personal construct theory*, Vol.1. Greenwich, CT: JAI Press, pp.155-186.
- Berzonsky, M. D. (1992a). Identity style inventory (ISI3). Unpublished Manuscript. State University of New York, Cortland.
- Berzonsky, M. D. (1992b). Identity style and coping strategies. *Journal of Personality*, 60, 771-788.
- Berzonsky, M. D. (2004). Identity style, parental authority, and identity commitment. *Journal of Youth and Adolescence*, 33, 213-220.
- Berzonsky, M. D., & Ferrari, J. R. (1996). Identity orientation and decisional strategies. *Personality and Individual Differences*, 20, 597-606.
- Blustein, D. L., Devenis, L. E., & Kidney, B. A. (1989). Relationship between the identity formation process and career development. *Journal of Counseling Psychology*, 36, 196-202.
- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 (平成16年1月28日答申). 報告書: 児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012301/002/010.pdf) (2004年1月30日).
- Dellas, M., & Jernigan, L. P. (1987). Occupational identity status development, gender comparisons, and internal- external control in first-year Air Force cadets. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 587-600.
- Dollinger, S. M. (1995). Identity status and the five-factor model of personality. *Journal of Research in Personality*, 29, 475-479.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle: Psychological Issue*. New York: International Press, Inc.
- 古市裕一 (1995). 青年の職業忌避傾向とその関連要因についての検討 進路指導研究, 16, 16-22.
- 堀野 緑・森 和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心

- 心理学研究, 39, 308-315.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002). 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書)
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. (1976). Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.
- 三村隆男 (2004). キャリア教育入門: その理論と実践のために 実業之日本社.
- Nurmi, J., Berzonsky, M. D., Tammi, K., & Kinney, A. (1997). Identity processing orientation, cognitive and behavioural strategies and well-being. *International Journal of Behavioral Development*, 21, 555-570.
- Super, D. E. (1983). Assessment in career guidance: Toward truly developmental counseling. *Personnel and Guidance Journal*, 61, 555-562.
- Super, D. E. (1990). A life-span, life-space approach to career development. In D. Brown, L. Brooks, & Associates (Eds.), *Career choice and development: Applying contemporary theories to practice*. 2nd ed. San Francisco: Jossey-Bass, Inc, pp.197-261.
- 鑑 幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (共編) (1997). アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 鑑 幹八郎・岡本祐子・宮下一博 (共編) (2002). アイデンティティ研究の展望Ⅵ ナカニシヤ出版
- Turner, S. L., Trotter, M. J., Lapan, R. J., Czajka, K. A., Yang, P., & Brissett, A. E. A. (2006). Vocational skills and outcomes among Native American adolescents: A test of the integrative contextual model of career development. *The Career Development Quarterly*, 54, 216-226.
- Vondracek, F. W., Schulenberg, J., Skorikov, V., Gillespie, L. K., & Wahlheim, C. (1995). The relationship of identity status to career indecision during adolescence. *Journal of Adolescence*, 18, 17-29.